地質ニュース

昭和60年12月　第376号　1985

タービダイトの話 (6)
　タービダイト砂岩単層の形態を探る……徳橋秀一…6

ゴードンリサーチコンファランス
　—Frontiers of Sciences……石原舜三…24

ヒマラヤの海と　その消滅—その1……中嶋輝允…33

鉱床生成と地球環境……梶原良道…46

ただ今　ヒットチャート独走中……脇田浩二…60

海外室だより……海外室…67

鰺ケ沢　AJIGASAWA……平山次郎・上村不二雄…71

口絵　ヒマラヤと地質調査　中嶋輝允

編集 地質調査所

発行 株式会社 実業公報社

表紙の写真

アンナプルナ山群北面

中部ネパール，アンナプルナ山群は主峰アンナプルナⅠ(標高8,091 m)を盟主として7,000～8,000 m級の峰々が連なる一大山塊である．　この山群の南面には　中腹に沿って主中央衝上断層(Main Central Thrust)が東西に走りその上に白っぽい片麻岩や片岩などの変成岩が重なる様子が遠望できるが　北面にはそれらはなく　変成岩の上位に重なる古生代のテチス堆積物が主としてみられる　写真を撮った位置の標高が約3,500m　白銀に輝く稜線部が標高約7,500 m　2つの地点の水平距離は約8 km　驚くべき勾配である．

そこに懸る山岳氷河は　落っこちない程度にかろうじてへばり着いている感じである．　北面に切り込む谷間のそれぞれには　入口付近に美しい針葉樹林やエメラルド色に輝く沼があり　入口から歩いて間もない距離には高山植物の咲き乱れるモレーンの丘や氷河湖がみられる．　そして　その奥には谷氷河が続き　はるか天上へと導く．　インドに興ったヒンズー教や仏教がヒマラヤを聖地あるいは極楽浄土とみなしたのが納得できるような清らかな美しさがそこにある．　(文・写真：中嶋輝允)

1月号予定目次

年頭所感

巻頭文

日本の地熱資源の評価

広域的な鉱物資源の評価について
　——その現在と将来——

世界のエネルギー資源と資源評価の方法について

資源問題と宇宙技術

地質調査所の国際活動の概要（昭和59年度）